



Title	1920年代を中心とした在日外国人をめぐるネットワークの点描：バラカトゥラー、グルチャラン・シン、イネ・ブリンクリー、ポール・ジャクレーとその資料紹介
Author(s)	橋本, 順光
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 51-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94799
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1920年代を中心とした 在日外国人をめぐるネットワークの点描：

バラカトゥラー、グルチャラン・シン、イネ・ブリンクリー、
ポール・ジャクレーとその資料紹介

橋本 順光

はじめに タウンSENDによるアジア主義の予言

英国のジャーナリストであるメレディス・タウンSENDは、日露戦争の直後に不気味な予言を書き残している。東京でこそあからさまにはなっていないものの、それとわからないかたちで、ヨーロッパ人を追い落とす深謀遠慮な計画が進められるだろうというのである。タウンSENDは、極東の島国がロシアに勝利したという報道から、アジアの民族のあいだに反ヨーロッパの狼煙があがり、これまでのヨーロッパ優勢だった均衡が大きく崩れるのではないかと考えたのである¹⁾。ナポレオンやジンギスカンといった軍事的な天才によって近代戦争に勝利したのではなく、西洋文明を掌握したことが原因であることを強調し、それゆえ従属を当然と考えてきたアジア諸国に及ぼす影響を懸念している。1901年の刊行後、広く英語圏で基本文献として参照され、版と増補を重ねた『アジアとヨーロッパ』の第3版(1905)序文でのことである。義和団事件、日英同盟、日露戦争、そしてロシアの敗北と、歴史的な事件が次々と起こり、その転機に応じてタウンSENDは新たな版で新たに序文を書き添えた。その変遷を見ると、専門家でさえその変化に戸惑いを隠せないアジア像の大きな変化が如実にうかがえる。

『アジアとヨーロッパ』の刊行の翌年に締結された日英同盟は、西洋の列強がアジアの新興国と曲がりなりにも対等の同盟を結んだゆえに、欧亜の関係を転機になると考えられた。そのことは、日露戦争開戦前夜の日本を英国人が観察した記録の冒頭に、北沢楽天の「日英

1) Meredith Townsend, *Asia and Europe*, 3rd ed., Preface, (London: A. Constable, 1905), xviii-xx. 1911年に第4版が刊行されているが、基本的に本文に異同はないものの、1911年の刊行後、同時代に大きな反響を及ぼした。

同盟、ブリタニアとやまとひめ」(1902)が転載されたことからもうかがえよう(図1)²⁾。しばしば英国でみられたような英国人男性と日本人女性ではなく、両国を共に女神として描いた点もさることながら、その二人が極東を保護している描写は、そうした権益をめぐってロシアと戦争が起こる直前だったゆえに英国の読者層にとって大いに関心を引いたのだと思われる。いみじくも図版の説明には、「日本の高級紙である時事新報が日英同盟について掲載した漫画。漫画の「子供」は中国と朝鮮であり、ここで明示されている同盟の主な目的は、中国と朝鮮の保全にほかならない」と、日本の領土的な野心への警戒が明記されている。実際、この絵を口絵にした本書は、日本の経済的脅威に警鐘を鳴らしており、そもそも日本の商人は信用できないことを強調している。

しかし、日露戦争はそれ以上の脅威を及ぼすことになった。タウンセンドは、日本の勝利とロシアの敗北により、英国のインド支配が長くないことを悟っている。その序文の変遷をみれば、彼のいうアジア、それは東アフリカから、アラビア半島、インド、中国、日本など、ヨーロッパ以外のユーラシア大陸の東方をすべて含んでいるのだが、日英同盟と日露戦争を経過することで、ヨーロッパの草刈り場だったはずのアジアが過去の存在になったと考えたことがわかる。タウンセンドは、英国支配を現地インドで見聞きした経験をふまえ、つまるところ欧亜のあいだで相互理解というものはおよそ不可能であり、したがってたとえどのような手を使ってもその支配は長続きせず、共存もできないと考えるにいたったのである。

この人種間闘争を宿命と考える悲観論は、アジアとヨーロッパの双方において人種闘争を煽り立てることとなった。タウンセンドのアジア論は、アジアにおいては、英国の衰退の現れとして受け取られ、アジア諸国のナショナリズムないし、ナショナリスティックなアジア主義を刺激し、一方のヨーロッパでは、そうした東洋やイスラム諸国の脅威が過剰に煽られたのである。そんなタウンセンドが希望を見出していたのはアメリカだった。地理的にも人種的にも、アメリカは欧亜の調停者となりうるのではないかと考えたのである。しかし、タウンセンドの著作は、アメリカではむしろ移民排斥に援用されることになった。特にロスロップ・ストダードは、悪名高い『有色人種の勃興』(1920)でタウンセンドをしばしば引用して、人種闘争史観を展開した。

ストダードは、第一次世界大戦はヨーロッパの内戦にほかならず、現代のペロポネソス戦争になぞらえた。内戦により、ヨーロッパは没落し、有色人種が台頭して押し寄せると考

2) W. Petrie Watson, *Japan: Aspects & Destinies* (London: Grant Richards, 1904), Frontispiece. この絵が、子供の部分を削除し、保護国への野心を打ち消す形で、例えばタバコのハッピーなどの図版に使用されたほか、かるたなどでも再利用された点については、菅野洋人「新聞付録『やまとひめとブリタニヤ』について」『郡山市立美術館研究紀要』3(2003)を参照。ここで指摘されているように、その初出は、1902年で付録として石版画が多数で回ったほか、楽天の本名である保次にちなんで Y. Kitazawa と署名されている。

えたのである。事実、英国のインド支配が長く続かないというタウンセンドの主張は、例えばケンブリッジで学んでいたネルーを大いに勇気づけ、日本でも小寺謙吉の『大亜細亜主義論』（1916）始め、アジア主義にしばしば援用されたことはよく知られている。たしかに独立や革命をめぐる運動は盛んになっていった。第一次世界大戦はたしかに未曾有の破壊と殺戮を引き起こしたが、同時に兵站の整備により、人と事物の移動が容易となり、戦争の反動は、民族主義と同時に国際融和を求める運動を隆盛させた。本稿では、こうした1910年代から1930年代にかけて民族主義と国際主義がそれまでになく対立した日本に滞在した4人の「外国人」と彼らをめぐる人脈を事例にとりあげ、適宜、公文書や資料を用いながら、その虚実を明らかにしたい。

バラカトゥラーとハサン波多野烏峰

タウンセンドが予言してから、早くも5年後、英国政府は日本への注意と警戒を実感することになった。1909年に『イスラミック・フラタニティ』という反英的な雑誌が創刊されたのだが、その編集と発行を行っていたのが、当時の東京外国語学校ヒンドゥスターニー語学科（現在のウルドゥー語学科）で講師を務めるバラカトゥラーであり、さらに彼の右腕として協力していたのが、“U. Hatano”という日本人だったからである。すでに多くの研究が指摘するように、バラカトゥラーはドイツからも資金提供を受けていたインド独立運動組織ガダル党の一員であり、日本でも公然と反英の宣伝に従事したのだった。どのような講義を行ったのかは十分に記録は残っていないが、インドへの愛国心が強く、独立を始終訴えていたという弟子の証言が残っており、英国政府が衝撃を受けたことは想像に難くない。実際、英国は日本政府へ強く抗議し、『イスラミック・フラタニティ』の発行差し止めとバラカトゥラーの送還を迫った。

一方、日本の協力者は波多野烏峰あるいは春房といい、1911年には、妻の日置安子とその父ともどもイスラム教に帰依し、ハサン波多野という日本最初のムスリム改宗者として報道された。英語を得意とした波多野は、バラカトゥラーの活動を支えただけでなく、その原稿や主張を日本語で紹介し、その名も『大東』というアジア主義団体の亞細亞義會が発行する雑誌で詳しく紹介したのだった。波多野は、バラカトゥラーから資料の提供を得て、インドの独立を支援し、呼びかけるパンフレットを複数執筆し、それらはさらに例えば、オスマン朝のトルコで紹介され、近代化を模索していたトルコの知識人たちに多大な影響を与えることになる。いみじくも波多野がバラカトゥラーに関して頻繁に寄稿した『大東』は、タウンセンドの『ヨーロッパとアジア』を13回にもわたって詳しく紹介する記事が連載されていた。その「未来の亞細亞を読む」題された連載記事は、第4年（11）（1911-11）から、筆

名が天心如来と変わるので、おそらく編集と発行を兼ねていた中野天心こと常太郎が執筆者であろう。まさにタウンSENDが1905年に予見したように、日露戦争での日本の勝利がアジアを広範にわたって刺激し、ヨーロッパとの関係を変えてゆく発端が、はやくも開かれたのである。事実、英国政府が日本のアジア主義や反英運動に気づき、諜報や内偵のためにインドなどから人員を要請し、調査を本格化させたきっかけが、このバラカトゥラーとその協力者ハサン波多野こと波多野春房もしくは烏峰の活動だったのである。

例えば『イスラミック・フラタニティ』や波多野のパンフレットをオスマン朝のトルコで翻訳に関わったのは、ヒルミ・ナカワこと中尾秀男であり、彼はトビリシでイスラム教に改宗し、ドイツのエージェントとして活躍するなど、その後、英国の諜報機関に要注意人物の筆頭にあがることになる³⁾。バラカトゥラーもまた、こうした英国の覇権に対する反帝国主義のハブともいえる存在となっていた。先行研究が強調するように、バラカトゥラーはまた孫文や梅屋庄吉ら中国の革命支援運動家とも交流があり、バラカトゥラーに感化されての波多野らの改宗の儀式では、ベアトリス・レインこと後に鈴木大拙の妻となり、日本におけるバハイ教や神智学サークルの中心となる人物が出席していて、バラカトゥラーはバハイのネットワークとも関係があったからである⁴⁾。

このような蜜月関係にあったにもかかわらず、すでに指摘があるように、波多野は1914年になってバラカトゥラーやガダル党の情報を英国に売り渡している。インドおよび国外のガダル党の関係者リストと、上海か香港かで計画されていた英国大使館員毒殺計画の密告が中心であった。この点については、それが波多野について断片的な言及が英国側の記録にしか残されていないという資料の制約があっただろう、例えば久保田文次のように「奇怪な行動」として疑わしくみなすか、「密告者」として変節をわずかに言及するかがほとんどであった。管見では、わずかにディグナンが英国の公文書館に残された波多野との詳細な引見記録を引用しており、波多野が前金で25ポンド、情報提供後に25ポンドを要求し、さらに英国公使館員毒殺計画をほのめかすことで恒常的に資金を手にしようとしたものの、失敗したことが記されている。波多野は、もし英国が断るならば、バラカトゥラーに金銭を要求すると述べたという。この記録は、ディグナン以降、なぜかほとんど取り上げられることがなかったが、詳細に波多野の主張と、提供されたガダル党のリストが収録されており、波多野の密

3) 二葉亭四迷の弟子として東京外国語学校でロシア語を学び、田中逸平とメッカ巡礼を行った最初期の日本のイスラム教徒であるだけでなく、ロシアと日本、そしてアメリカやメキシコにと神出鬼没に活躍して英国に二重スパイと疑われ、トルコで没した中尾の数奇な生涯と事績の全容はきわめて捉え難い。活躍が海外であったため、中尾は日本よりトルコなどのイスラム研究者のあいだでむしろ注目されることが多いが、英国やドイツなどの諜報記録との照合ははまだ十分ではなく、日本の記録との調査とあわせて、別稿を用意しなければならないだろう。

4) Ulrich Brandenburg, "An Inventory of the First Muslim Journal in Japan: The Islamic Fraternity (1910-12) and Its Successors", 『日本中東学会年報』35巻第2号(2019), pp.193-194.

告はまず疑いえないと考えられる。

そしてその経緯をみれば、一見、変節にみえるこの行動は、金の切れ目が縁の切れ目という極めて散文的な理由が大きかったと思えてくる。つまりは状況の変化、おそらくは1914年にバラカトゥラーが、英国政府の圧力により、日本を去ることになったことが理由であったのではないか。英国公使のカニングラム・グリーンによれば、反英活動に関する英国の抗議を受け、東京外国語学校の校長（director）がグリーンを訪問し、バラカトゥラーの契約が更新されず、1914年3月に離日することになる見込みであることを伝えたのだという。時期からいって、この東京外国語学校の校長は、近世の日欧交通史を専門としていた村上直次郎であろう。さらに校長は、今後は、こうした「プロバガンダ」に加担しないような適切な講師をインド政府に推薦してほしいと、グリーンに持ち掛け、その結果、1914年6月にはイラーハーバード市委員会の視学官（inspector of schools for the Allahabad Municipal Board）だったデヴァリ・ラル・シン（Devari Lal Singh）が推薦されて着任することとなった⁵⁾。もちろん、これは政治の力が働いており、グリーンは、契約不更新に伴うバラカトゥラーの離日について加藤高明外相から聞いており、4月に辞任した前任の牧野伸顕元外相の手配に感謝する旨を加藤に伝えたという。その時にはおそらくバラカトゥラーも契約不更新を言い渡されたのだろう。日本での右腕として頼りにされていた波多野は、それを耳にして、バラカトゥラーの不在中に英国に接触した可能性が高く、変節なり奇怪に見えた行動は、こうしたいきさつあつてのことではないかと考えられる。

もちろん、これらは推測でしかない。ただし、東京の英国大使館に接触してきた波多野についての記録を見る限り、たとえそれが英国の官憲による一面的な視点ということ割り引いても、波多野は目ざとくパトロンを乗り換えようと画策する日和見主義者という印象はぬぐえない。ここで波多野が英国の大使館関係者に面会して強調したのは、イスラミック・フラタニティほかの活動は、あくまでバラカトゥラーの人柄に惹かれて手伝ったにすぎないこと、今となつてはバラカトゥラーとは距離を置きたいので、今後、同雑誌をそれとわからないように反英から親英へと論調を変化させることが可能であること、したがって、そのために今後は英国側から資金を提供してほしいことである。この時、波多野に面会したのは、後に日本仏教の研究で知られることになるパーレット（Harold George Parlett）とキルマノック（Lord Kilmarnock）であった。今後の情勢の変化で裏切ることは想像に難しくなく、時にガダル党と英国政府の双方から資金を受け取ることもあり得たからだろう、当然ながらその申し出はすげなく謝絶された。

しかし、波多野は食い下がった。今度は東京の英国大使館員を毒殺しようという計画があ

5) Don Dignan, *The Indian revolutionary problem in British diplomacy, 1914-1919* (New Delhi: Allied Publishers, 1983), p.87.

ることを英国大使館員に告げ、自分にはそれを阻止できる力があるとのめかしてきたのだという。こうした幼稚な恐喝めいた申し出を、当然ながら英国の大使館員たちは意に介さず、これ以上の接触は、漏洩と裏切りを引き起こすものでしかないことをすぐに悟ったと思われる。カニンガム・グリーンは、波多野のいう毒殺計画を「ブラフ」でしかない一蹴し、以降、接触無用と申し渡したと本国に報告している。にもかかわらず、波多野はあきらめきれなかったようだ。バラカトゥラーと入れ替わりに、同じくガダル党員として日本へ訪問してきたバーグワン・シンに面会したことから、今度はバーグワン・シンの情報の密告を、英国大使館のN・ノーマンに持ち掛けている⁶⁾。ノーマンは、波多野の一連の行動を知っていることだろう、波多野というあずかり知らぬ男がそうした情報提供を持ちかけてきたことを、波多野の英文の手紙とともに日本の外務省に送り、バーグワン・シンの送還を強く働きかけた。こうしてバーグワン・シンもまた日本を去っていったのだ。

しかし、その後も波多野は同様に虚言と恐喝を交えて金銭をゆすり取っていたことが記録に残っている。そもそも波多野について言及した研究は、二つに分類できる。日本最初期のイスラム信者かつバラカトゥラーの協力者としての側面に注目したものか、1923年に有島武郎と心中した波多野秋子の夫であることをとりあげた文献かのどちらかであり、両者は交わることがない。しかし、両者の文献を読むと、一貫して波多野が、機会を逃すことなくしかも強引に金銭を要求してきていたことがうかがえる。有島と波多野の自殺について、当時の報道の多くが有島に同情的で波多野を批判していたという。そのなかで異彩を放つのが、波多野が秋子と結婚する前の妻である日置安子の談話記事である。つまり、父である日置健太郎男爵やハサン波多野烏峰とともにイスラム教に改宗したはずの「ファティマ」が、烏峰はおよそ女性と金銭にだらしがなく、米国仕込みだという英語を教授していた生徒たち3-4人とも関係があったとかなり詳しい内実を語ったのである⁷⁾。ここで安子が提供したと思われる写真で、波多野はイスラムへの帰依を強調するためだろう、通称トルコ帽ことフェズをかぶっている(図2)。額面通りに受け取るわけにはいかないが、波多野のイスラムへの表面的な理解と改宗には、こうした複雑な女性関係の幼稚な正当化であった可能性は捨てきれまい。ただ波多野の内面や動機はともかくとして、ここで確認しておきたいのは妻の秋子と有島武郎が恋愛関係にあることを突き止めた際の波多野の恐喝である。妻と有島が千葉に旅したことを知った烏峰は、秋子に対して国民新聞の記者が有島宛の手紙を入手して発表し

6) FO 371/2013ほか。なおバーグワン・シンとの接触は久保田文次の『孫文・辛亥革命と日本人』(汲古書院、2011)でもすでに触れられている。

7) 1923年7月9日付『国民新聞』。文化研究会編『厳正批判有島武郎の死』(文化パンフレット23号、文化研究会出版局、1923)も参照。この資料は、菅野聡美の『消費される恋愛論——大正知識人と性』(青弓社、2001)で利用されているほか、永畑道子の『花を投げた女たち:その五人の愛と生涯』(文芸春秋、1990)でも言及されている。

たいと自分に言ってきたとって責めさいなんだという。これは有島の友人である足助素一がまとめた記録にあることなので、事実かどうかは確認できない。足助によれば、手紙の公表を認めるかどうかは自分の手中にあると波多野は述べて、二人の関係を認める代わりに、これまで妻の明子を養ってきた経費と慰謝料としてまず手始めに一万円と有島に要求したのだという。あくまで足助の記録ではあるが、十年足らず前に、ブラフと見抜かれながらも、虚言と駆け引きで情報を提供して金銭を手にした手口は一貫しており、想像の産物だったとは考えにくい。

したがって、波多野がイスラムの教えに深く帰依して改宗したかどうかは、少なくともその後の行動から判断する限り、疑わしいと言わざるを得ない。波多野が春房と烏峰の二つの筆名を使い、自己修養に関する本を多数執筆しているのは、なるほど資金のためだったかもしれないが、二枚舌もあってのことだろう。たしかにバラカトゥラーの人柄や主張に共感したところは少なくないだろうが、ガダル党の活動資金が主たる目的でなかったとは考えにくい。その改宗が便宜的なものであったことは、波多野烏峰名義で刊行した『小学校に於ける軍人精神の鼓吹』で、バラカトゥラーの質問に答えた波多野自身の回答からも読み取れる。「篤実なる学者にして、且つ熱心なる回教徒なり。君、一日著者に問うに、日本的国民の宗教的傾向の強弱を以てしたり。著者之れに答えて曰く——」として、「其国民は、他の宗教を信ずるには余りに忠君愛国の精神強し。されど採名補短は、最も美わしき国民の傾向なり。モルモン教も、救世軍も、熱心にだに伝導すれば、必らず一時的信者の幾人かを得んとす。（中略）されど国民性を棄てざるまでも、国民性の幾分かを失いて随喜偈仰の涙を濺がしめんは、是れ断じて不可能の事と云う可し」というのである⁸⁾。これはちょうど自身の改宗についてあらかじめ日本を中心に据えたアジア主義と矛盾しないことを断った弁明として読むことも可能だろう。これはいささかの後知恵ながら、イスラムの教えに帰依しても、「採名補短」の方便であり、忠君愛国は何ら変わることがないという波多野の弁明を先回りした記述のように聞こえる。むろん波多野の内面を知ることはできず、おそらくその必要もあるまいが、波多野の行動が随喜偈仰を求めるものではなく、実利的な採名補短が原理であったことを何よりも示しているといえる。

グルチャラン・シン、アタル、シャストリ

こうした東京でのインド人社会と日本のアジア主義者との関係を内偵するために、インドから送り込まれた英国のエージェントの筆頭がH・P・シャストリである。シャストリは豊

8) 波多野烏峰『小学校に於ける軍人精神の鼓吹』（昭文社、1911）、pp.114-115.

かな学識と高い語学力とで、さして時間をかけることなく大川周明やボースなど監視すべき人々に接触し、詳細な報告書を英国大使館に送り続けた。およそどのような人々であっても、衝突することも心を開くこともなく、友人のようにふるまえたように見えるシャストリだが、その通称エージェント P の報告を見ると、アタル (Hariharnath Thulal Atal) というインド人とどうもそりが合わなかったことがわかる。アタルは、前述したバラカトゥラーの後任デヴァリ・ラル・シンの後、東京外国語学校のヒンドゥスターニー語講師に就任していた (図 3 右の 1921 年 6 月 16 日付読売新聞朝刊の写真参照)。シャストリは、アタルを要注意人物として促しているのだが、大使館側も個人的な感情があることには気づいており、額面通りには受け取らなかったようだ。しかし、アタルは 1921 年 6 月に自殺してしまう。管見の限り、詳細な記録を見つけれられていないが、図 3 右の読売新聞などの報道によれば、英国政府の圧力で情報の提供や密告を求められたからだという。アタルは、そうした裏切りを強制してきた人々の名前を遺書に書いており、東京のインド人社会を大いに揺るがせることとなった。アタルの追悼集会は、大川周明や鹿子木員信が出席して演説するなど、東京在住のインド人やアジア主義者による反英運動の会合となり、非道な圧力をかけた英国政府とインドに殉じた愛国者という図式を強烈に印象付けることとなった。例えば橘外男の『ナリン殿下への回想』(1938) を原案と謳いつつも、事実上、アタル事件の真相を描いた『進め独立旗』(1943) という反英プロパガンダ映画が後に製作されたほどである。

なおシャストリは、一足早く上海を舞台に諜報活動に従事しており、アタルの自殺にどこまでシャストリや英国政府が関与していたのか、管見の限りでは、はっきりとわかる文書は見つけられず、真相はいまだ不明である。アタル自殺の遠因となったと考えられるシャストリは、さして怪しまれることなく上海に渡ったが、その活動や噂から英国のスパイとうすうす怪しまれていたようだ。公文書では見つけられていないが、日比谷公園で裏切者として殴打されて泣き叫ぶという事件のほか、アジア主義を謳った会議に参加しながら、英国政府の主張をそのまま繰り返して反感を買い、あわてて修正したことが、殴打事件と同じく日本在住のインド人たちによって攻撃されたと記す資料がある⁹⁾。

このアタルと友人だったのが、グルチャラン・シンというインドの陶芸家である (シン旧蔵の写真である図 3 左の右及び中央人物参照)¹⁰⁾。シンは柳やバーナード・リーチに感化を

9) シャストリについては注 12 ほかの拙論参照。『進め独立旗』については豊田雅人「戦争映画の中の人情～太平洋戦争中の日本映画は、アジアをどのように描いたか～インドを題材にした映画に関する考察」(2011) や宜野座菜央見「戦時日本映画における断絶と継続」(2016) を参照。ただし、いずれもアタル事件の報道とは十分に比較考察されていない。

10) シンの生涯と事績の詳細については橋本順光「インドの陶芸家グルチャラン・シン」、『民藝』2015 年 3 月号－6 月号を参照。シンについてはドキュメンタリー映画 *The Lotus and the Swan* (2023) が制作され、筆者も協力した。

受け、1920年夏に朝鮮半島から中国大陸を旅してまわった。柳の「彼の朝鮮行」（1920）で、インドの友人「S」とあるのは、シンのことである。朝鮮半島に移り住んで、土地の人々と工藝を愛し、柳にその魅力を説いた浅川巧にも、シンは会っている。巧の兄伯教の旧蔵で知られる青花辰砂蓮花文壺に、シンもいたく魅入られたようだ。壺を囲んで巧と一緒に撮影した写真が残っており、『柳宗悦全集』の第八巻や浅川巧の『朝鮮民藝論集』（岩波文庫）にも収録されている。そのキャプションにあるように、日本でシンはしばしばシングと名乗った。

シンが、日本にやってきたのは1919年のことである。現在の東京高等工業学校（現在の東工大）の窯業科に学び、柳の妻兼子の独唱会に出かけたのがきっかけで柳と友人になったという。そこからバーナード・リーチと出会い、濱田庄司や富本憲吉とも親しくなっていた。こうして陶磁器の技術を習得しに留学したシンは、すっかり陶芸に目覚めるようになる。当時のインドでは、陶磁器は使い捨てられるような低い地位にあった。シンはインドで陶芸家の先駆けとなり、アーツ・アンド・クラフツ運動や民藝運動に見られるような、生活の中で手作りの陶磁器を使う習慣を根づかせることになった。そこでシンが作陶の際に大いに参考にしたのは、リーチ同様に、李朝や高麗の器だった。浅川と共に見た蓮花文の壺を多分に意識した作品も残している。この蓮の文様をシンは特に好み、その後の陶芸でも繰り返し用いた。ここで資料的な価値に鑑み、クラフツ・スタディ・センターが所蔵するリーチ宛のグルチャラン・シンの京城の典東旅館で書かれた手紙を引用しておこう。

リーチへ

私は1週間滞在するためにここに来たが、すでに3週間が過ぎた。美しい家具、オンドル、枕、食事、本当にすべてが好きになってしまった。去り難いことこの上ない。朝鮮人の服装、習慣、芸術はインド人によく似ていて、私は祖国の次に愛し始めたくらいだ。古い陶器やその他の古いものを集めてみたので、ぜひ見てほしい。

金剛山ことダイヤモンド・マウンテンも訪れたが、そのグロテスクな峰々、力強く、静かで、崇高な美しさには、去り際に涙が出た。石窟庵の前に立ったときもそうだった。ある議員が一日だけ京城を訪ねてきた。緊張のため、政府は市内に多くの警察官を配置している。店は閉まり、街は暗い雰囲気だ。今のところ大きなトラブルはないが、とても悲しい。

浅川氏からよろしくとのこと。あなたはいつも私の心の中にいる。

子供が兄に冒険を語るように、私はあなたにいろいろなことを語りたい。それは、またいつか……。

大仕事を始められたと思うが、どんな感じだろうか？主があなたにすべての成功を与え、常に栄冠を授けるように。

リーチ夫人によろしく、そして子供たちに愛を。

東京はかなり寂しい。来月、学校が再開したら、東京に行く予定。

敬具 G.C. シン¹¹⁾

シンが蓮を好んだのは、それがインドから日本までをつなぐ共通の文様だったからだろう。中国大陸や朝鮮半島での旅はそんなつながりを確信させたに違いない。いみじくも柳は、1916年に慶州市の石窟庵を訪ねた時の一文で、そんな感慨を特筆している。「石仏寺の彫刻に就て」(1919)で、唐、新羅、そして飛鳥時代の日本という東洋の黄金時代に生まれた石窟庵は、インドのアジャンター石窟に端を発しており、それゆえ「東洋の宗教並びに芸術の帰結」と述べたのである。岡倉覚三が『東洋の理想』(1903)で示唆したことを、柳も実感したことになる。シンも、1920年8月25日付のリーチに宛てた書簡で、石窟庵に感銘を受けたと記しているのも、インドから日本への仏教美術の伝播をシンも同じことを体感したのではないか。例えばシンに案内されて奈良をまわった英国の友人は、アジャンターの壁画は朝鮮半島を経て法隆寺の壁画へと流れ込んでおり、まさに岡倉がいうように「アジアは一つである」ことを確信したと記している。なるほどアジャンターでも法隆寺でも、仏は蓮の花を手をしている。シンが李朝の蓮の絵付けに、インドから日本までを陶芸がつなぐことが十分に可能と手ごたえを感じたとしても不思議ではない。

シンが案内した友人は、ジェイムズ・カズンズという。彼は慶応義塾大学で英文学を教え

11) Dear Leach

I came here to stay for a week, three weeks have already passed and I don't want to leave this place. I am staying in a Korean inn, the beautiful furniture, ondol, pillows and food, indeed everything I have begun to love. How shall I tear myself from these? Coreans resemble so much Indians in dress, custom and art that I have begun to love it next to my motherland.

I have made some collection of the old pottery and other old things which I would very much like you to see.

I visited also Kongo San, Diamond mountain, its grotesque peaks, strong, silent and sublime beauty made me cry when I was leaving it. Same was the case when I stood before the cave hermitage of Sei Kutsuan.

Certain Congressmen have come to visit Keijo for a day. Owing to some tension they (Govt.) have put much police in the city. Shops are closed and the city looks gloomy. As yet there has been no serious trouble, but it is very sad.

Compliments from Mr. Asagawa. You are always present in my thoughts.

I wish to tell you many things just as a child would tell his adventures to his elder brother. Well some day - I hope you have started your great work. How do you find it? May He give you all success, and always crown you with laurels.

Give my best wishes to Mrs. Leach and love to children.

Tokio is rather lonely. I shall be in Tokio next month when the school reopens.

Yours very sincerely, G.C. Singh

るかたわら、神智学協会の東京支部設立にかかわったアイルランドの詩人である¹²⁾。神智学協会は、後にリーチが入れ込むことになるバハイ教にも似て、さまざまな宗教は根本で一致すると考え、それゆえに民族や性別で差別されない友愛の共同体を理想として掲げていた。カズンズの滞在記『新日本』（1923）には、勧誘もかねてだろう、リーチや柳に面会した時の記録が詳しく記されている。その点で、神智学協会に加入し、アジアにまたがる陶芸を制作するシンは、カズンズにとって神智学の理念を体現する存在であったようで、その作品を東洋の融和の好例として賞賛している。シンはといえば、1921年1月18日付の『ジャパン・アドヴァタイザー』によれば、東京での例会でインドの神秘主義者カビールについて講演している。カビールは、ヒンドゥー教、イスラム教、シク教が根源的に同一であると主張したとして神智学協会が高く評価されていた。シンは現在のパキスタンにあるグジュラーンワラー市でシク教の家に生まれたので、神智学の融和的な主張は切実だったのではないか。後に1970年代になって、そんなカビールの主張を裏書きするような代表作をシンは発表している。イスラム教、ヒンドゥー教、シク教の聖句がそれぞれ刻み込まれた三面の壺で、いわば三位一体を体現していると考えられるだろう。

帰国する直前の1922年1月、シンは東京の星製菓で個展を開いた。それを紹介する「印度人シング氏の製作陶器」という記事が、1922年2月発行の『国華』に掲載されている。高麗風にし三島風と、朝鮮半島の陶磁器を模範とするものが多いが、時に独自の作品があると評価している。ここまで朝鮮半島の陶磁器にシンが入れ込んだのは、柳らの感化というだけでは説明がつかないだろう。留学先に英国ではなくあえて日本を選び、朝鮮半島の人々や美術についてインドとそっくりだとリーチに書き送り、「母国の次に愛するようになった」と記したのは、同じ植民地として強い共感を抱いたからではないか。シンが加入した神智学協会の東京支部には、朝鮮半島出身の会員もいて、開城などでシンを案内したのも関係者であったと考えられる。帰国後のシンが、祖国のかつての青の陶磁器をデリー・ブルーとして復活させたのは、朝鮮半島で見聞きしたような郷土への愛着と誇りあつてのこととみて間違いあるまい。

そんなデリー・ブルーの作品が『世界陶磁全集』第16巻現代篇（1958）に収録されている（図4左）。後に陶磁の道を提唱したことで知られる三上次男が、「鉄砂や辰砂を巧みに使って清楚な草花を民藝風に描く」とシンについて紹介している。しかし、日本への留学は不明だったのか、李朝や高麗の陶磁器との関係は記されていない。したがってキャプションには

12) 詳しくは藤田治彦編著の報告書『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究一日英間に広がる21世紀の地平』所収の橋本順光「アイルランド神智学徒のアジア主義？ジェイムズ・カズンズの日本滞在（1919-1920）とその余波」を参照（<http://hdl.handle.net/11094/76031>で公開）。増補した英語版は、Hans Martin Krämer (ed.), *Theosophy Across Boundaries* (State University of New York Press, 2020) に収録されている。

「台附水鉢」とあるが、これは三島手の馬上杯を意識したと考えた方がよいのではないか。例えば柳は、『柳宗悦選集』第4巻（1954）で、同様に三島手の「酒杯」の写真を掲載している（図4中）。こうした李朝の器をシンも目にしたことだろう。この杯は、もともと騎馬民族が馬上で酌み交わしやすいよう作られたといわれている。元の時代にアジア各地に広がり、似たような器はインド以西にも見られる。シンは著書の『インドの陶芸』（1979）でも馬上杯の写真を掲載しており（図4右）、そんなアジアに広がる馬上杯の器を、三島手を模範としつつも、インドの生活になじむよう巧みに改変したのではないか。いみじくもシンは三上がいう陶磁の道を体現していたことになる。

ここで興味深いのは、おそらく柳に『朝鮮とその芸術』（1922）を送られて、グルチャラン・シンが朝鮮半島でみた線の美しさを特記しているところである。彼は1922年11月8日付でリーチに以下のように手紙を送っている。

柳から、あなたがロンドンで展覧会を開き、大成功を取めたと聞いている。

とてもうれしいことで、柳は数日前に朝鮮美術の美しいハンドブックを送ってくれた。私はその写真を何度も何度も見た。少なくとも百五十回は繰り返し見た。

ああ、朝鮮の線。私の記憶に描かれた絵のなかを流れゆく。

朝鮮人の歩く姿

新羅のスプーン

高麗の壺

金剛山

朝鮮の服のひだ

実際、東洋美術の繊細な線とシャープな線はどこにでもあって、東洋美術の中で優位を占めている。

富本は大阪での展覧会を成功させ、現在は東京での展覧会の準備をしている。

浜田はどこにいるのだろうか？もう帰国しているのだろうか？

もしまだいるのなら、帰国のついでにインドを訪ねてくれるようお願いしてほしい¹³⁾。

こんなにも朝鮮半島の美術を愛し、それを作品に取り入れようとしたにもかかわらず、濱田、富本、柳とも疎遠になってゆき、シンが連絡を取れるのはリーチのみになっていった。

そもそも英領インドがインドとパキスタンに分かれて独立したのは一九四七年で、北朝鮮が建国したのはその一年後である。朝鮮半島同様に、インドとパキスタンが緊張関係にあることはよく知られている。一九四七年と一九六五年に両国が衝突した原因はカシミール地方で、シンの故郷に近く、親しみのある土地である。一九七一年にも両国は深刻な戦争状態となっており、先に言及した三面の壺は、宗教と政治が鋭く対立した時代に制作されている。ここでは三つの宗教が一つの美しい器のなかで融和している。ここにはインドの分断を統合する願いが込められているのかもしれない。アジアの融和を体現するとみなされたシンは、頻発する対立に心を痛めていたからである。彼が日本や朝鮮半島で収集した陶磁器をチャンドーガルの国立美術館に寄贈したのも、争いで破壊されるのを恐れていたことだったという¹⁴⁾。その一方で、たとえ政治的に対立しようとも、人々が日々の生活で愛で、潤いと安らぎをもたらす器を作り続けるのは、争いに対する強烈な批判だったと想像できよう。ただ、インドというおよそ日本や英国とは異なる社会と環境のなかで、日本や英国の陶芸に学びつつ、インドで試行錯誤を続けたシンの作品は、アジア・アフリカ会議に前後してインドを訪

13) I have heard from Yanagi that you held an exhibition in London which was quite a success and that you now intend sending your exhibits to Japan. I am extremely glad at it. Yanagi sent the beautiful handbook of Korean art a few days ago. I have seen its photographs over and over again at least hundred and fifty times. Ah, the Korean line, I see it in my vision running in the pictures drawn across my memory – of a Korean walking
A Shiragi spoon
A Korai vase
The Diamond mountain
The folds of a Korean dress
And in fact everywhere where the delicacy of the line and its sharpness predominates in Eastern art.
Tomimoto had a successful exhibition in Osaka and is now preparing things for Tokyo.
Where is Hamada? Is he returning to his country? If he is still there? please ask him to pay me a visit in India while on his way to his country.

14) シンの息子で陶芸家のマンシムラン・シン氏への聞き取りにもとづく。シンの陶磁器コレクションについては国際交流基金ニューデリー日本文化センターがカタログを整備し、展覧会を行ったが、残念ながら日本での展覧会はまだ実現していない。詳しくは田中洋二郎『新インド入門』（白水社、二〇一九年）一五二–三頁を参照。

れた作家や陶工にとって十分に理解はできなかったといっよい¹⁵⁾。例外的に、1953年にインドを訪れた画家の阿部展也が、『世界文化地理大系』第10巻(1954)でシンとその妻の姿を写真におさめているが、とりたてて話題になることはなかったようだ(図5)。

なお上記のアタルやグルチャラン・シンに囲まれたゴビンドラオこと、H・S・ゴヴィンダ・ラオ(H. S. Govinda Rao)も、これまでほとんど注目されることがなかった(図3左の左人物)。しかし、このアタル事件のために、当時の在京インド人社会にあってはさして政治的活動に関与しなかった彼の経歴が記録に残され、日印の養蚕業をつないだ存在であった可能性が浮かび上がることとなった。

日本側の動静記録に従うなら、ゴヴィンダ・ラオは、帝大農科大学へ進学する目的で来日したが、進路を変更して、西ヶ原蚕糸学校こと北区の飛鳥山近くにあった東京高等蚕糸学校(現在の東京農工大学工学部の前身)に進学したという。おそらくゴヴィンダ・ラオは、日本で学んだ後に、インドの故郷で養蚕業に従事したのだろう。例えば、1938年、日印協会の中枢を担い、インド通の議員となっていた高岡大輔が、南インドのマイソール州を訪問した際に旧友の「ゴビンダ・ラオ君」に会ったという記述がある。高岡が東京で学生だったころ、「彼も留学生として蠶糸学校に通って」いて、約20年ぶりの再会だという。経歴と時期が一致することから考えて、同じゴヴィンダ・ラオであるとみてよいだろう。

高岡によれば、彼は今、「蠶糸局長として文化圏マイソールの中堅」を担っているという。実際、同時期のマイソール州の農業部門の報告書を見ると、蚕糸局部門長としてH・S・ゴヴィンダ・ラオの名前が見える¹⁶⁾。そもそも南インドでは、例えばマイソール州の隣のバンガロールでは、1898年にJ・N・タタの主導で日本式の蚕糸試験農場が設立されており、日本との技術交流が盛んだった。あいにくこの農場は失敗に終わったが、こうした基盤形成の延長に、1920年から始まるマイソール政府による蚕糸局部門の設立と、日本人専門家の雇用があった。そこでは養蚕技師のM・ヨネムラが蚕種の改良に従事し、製糸では佐藤エキが働いていた。このヨネムラの経歴は不明ながら、佐藤は、1919年に東京高等蚕糸学校の製糸教婦科を卒業し、1921年に単身でインドへ渡ったという¹⁷⁾。その点で興味深いのは、1915年のマイソール州農業部門スタッフ一覧に、養蚕部門でラマ・ラオ(Rama Rao)部門長の下、M・ヨネムラとミス・サトーが「シルク・エキスパート」として続き、4番目の実習生として、

15) 1956年にインドでシンに会った加藤唐九郎は、『かまぐれ往来』(新潮社、1984)、p.256で、「インドにはいい土がある。しかしインドのやきものの歴史となると全然だめだ」と断言している。

16) 高岡大輔『見たままの南方亜細亞』(日印協会、1939)、pp.301-2及び*Report on the Progress of Agriculture in Mysore* (Bangalore: Superintendent at the Government Press, 1939), p.138。動静記録については注12の拙論参照。

17) 清川雪彦「戦前インドにおける近代製糸技術導入の試み—その定着を阻害した要因は何か—」『経済研究』56(1) 69-89(2005)、p.85、p.88、注42。

日本へ留学予定のゴヴィンダ・ラオの名が確認できることである¹⁸⁾。蚕糸部門の実働は1920年から、佐藤の渡印は1921年から、という指摘と矛盾するが、ゴヴィンダ・ラオが養蚕の実務家になるために渡日したのは明らかだろう。そしておそらくは、マイソールの養蚕業の技術指導と振興に関わったヨネムラや佐藤の指導と奨励により、日本の養蚕学校への進学を決めたのではないか。したがって、帝大農科大学ではなく東京高等蚕糸学校へ進学したのは、より実務に近いことが学べるからという理由と考えるのが自然だろう。こうして日本で学んで後、ゴヴィンダ・ラオは、マイソールの蚕糸局監督官となり、戦後には局長にまでなったようだ¹⁹⁾。つまり、ゲルチャラン・シンもゴヴィンダ・ラオも、日本の技術に学んで、それを応用してインドの国力を底上げし、日本とインドの架け橋となったわけである。もっともアジア主義の理念にふさわしい業績を残したことになるが、いずれの二人とも同時代の日本からは忘れ去られたのであった。

イネ・プリנקリーとその家族

こうした日本におけるアジア主義の隆盛は、日英同盟の更新を日英両国ともに再検討することになった。更新で日英の国論が揺れていた頃、反日英同盟を目したプロパガンダ小説が、英国の大使館員によって書かれた。アシュトン・ガトキンの『キモノ』（1921）である²⁰⁾。そこで標的になったのは、英国人の父F・プリנקリーと日本人の母安子の間に生まれ、日英同盟の賜物のようにしばしば擬せられたイネ・プリנקリーであった。Inezと稲子と、日英双方で通じるようにということだろう、表記はまちまちだが、この名前そのものは、伊藤博文がつけたのだという²¹⁾。それが『キモノ』での彼女は、八重スミスという名の男を翻弄する妖婦か何かのように描かれ、イネは名誉棄損として訴訟まで決心した。ただ、結局、泣き寝入りを余儀なくされた。訴訟がかえって広報になってしまうからだと言われている。たしかに、イネ・プリנקリーは、長谷川時雨の『美人伝』でも少なからぬ噂された男たちの名を挙げられ、志賀直哉の「大津順吉」（1912）に登場する広大な庭のある邸宅に住まう（図6）絹・ウィーラーのモデルとしてつとに知られている²²⁾。また兄のジャック・プリנקリーが、神智学協会や仏教研究に近しかったこともあり、その縁でだろう、画家の久米民十郎に

18) *Mysore Agricultural Calendar 1915* (Bangalore: Government Press, 1915), Department of Agriculture, Mysore, Staff, ii.

19) India Department of Industries and Supplies, *Report of the silk panel* (Manager Govt. of India Press, Delhi, 1947), p.10.

20) 詳細は、橋本順光「英国外交官の黄禍論小説：アシュトン＝ガトキンの『キモノ』（1921）と裕仁親王の訪英」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57（2017）を参照。

21) 阿川弘之『志賀直哉』『阿川弘之全集』第14巻（新潮社、2006）、p.130.

22) 生井知子「稲・プリנקリーのことなど」『志賀直哉全集月報 21』（2001）を参照。

よる肖像画が残されている。

こうした小説や絵画を残した男性に比して、イネ自身に注目した研究はほとんどなく、その生涯もほとんど明らかとなっていなかった。しかし、丹念に資料を追うと、およそ小説や絵画で描かれたのとはおよそ異なる姿が浮かび上がる。と同時に、アシュトン・ガトキンが、あえてイネ・プリンクリーをモデルにした一因も理解できるように思われる。

おそらくもっとも最初に公的な姿で登場するのは、1905年のことで、尾崎行雄がテオドラ英子と再婚した結婚式で「ブライドメイド」を務めたのがそれである。テオドラ英子は、名前が示すように母が英国人で父が日本人であり、同じ日英双方にルーツを持つ身としてイネが選ばれたのだろう²³⁾。

志賀直哉が「大津順吉」でも記したやまとひめの活人画についてだが、これは同様のことを兄のジャックが後年、回顧している。それによれば、日露戦争の時、英国大使館マクドナルドの令嬢アイヴィーがブリタニア、妹のイネがやまとひめに扮した活人画が披露され、大変な喝采を浴びたとジャックが書き記している。ちなみに背景は平福百穂だったという²⁴⁾。おそらくは、北澤楽天のブリタニアとやまとひめを転用したものだったのだろう。「大津順吉」の記述では、直近の女性雑誌の口絵に、同様の活人画の口絵が掲載されていたというが、該当するような記録や写真はいまだ見つけられていない。ただし、1906年3月に、青木周蔵の邸宅で18もの活人画が披露された際、その一つが「西洋から来た平和の天使が、日本の平和の精と固く手を握り合う」というもので、それぞれアイヴィー・マクドナルドとイネ・プリンクリーが演じたのだという。なお背景画を製作したのは、東京美術学校の和田というから、おそらく和田英作だろう²⁵⁾。遺族に残された写真にティアラ状のものをイネがつけているのは、この時の名残なのかもしれない（図7）。

同じ1906年12月には『新小説』誌上にて、山岸荷葉の「舞台顔」が掲載されている。長谷川時雨が、文藝倶楽部かなにかで二代目左団次が洋行前にイネに入れ込んでいたことをモデルにした小説があったと書いているのは、この「舞台顔」のことだろう。洋行前の左団次が、女優として仕込まれた裕福な家の「舞台顔」の娘イトと、同じ歌舞伎の世界の従妹である養妹ツタとの三角関係に悩む物語である。裕福な一家の友人として日本通のフランス人夫婦が登場しはするが、イトとは無関係である。ただし、洋行前の興行で日本の「サラ・ベルナア」のようになるだろうという一節と、そのもう一つの出し物が紅葉狩りで、ツタがイトの声を耳にしてその舞台姿を幻影でみるというのは、イトの「舞台顔」の裏に鬼か妖のような姿があることを示唆していると考えられるかもしれない。サラ・ベルナルは、

23) 『新聞集成明治編年史』第12巻（財政経済学会1936）、p.499.

24) 『丸』1-8（1948）「フランク・プリンクリーと明治時代」、p.84.

25) *Japan Weekly Mail*, Mar. 17 1906, Volume 45, "Tableaux Vivants in Tokyo", p.286.

時に妖婦を演じて有名だったフランスの女優であり、紅葉狩りは若い女に化けた鬼が武士に見抜かれて斬りつけられる演目である。なお奇しくも「舞台顔」の口絵は、和田英作だった²⁶⁾。ただし、左団次は洋行以降、イネとは疎遠になってしまい、結婚の噂はすぐに立ち消えになったという。あるいは通訳や便宜をはかる役目をイネに期待していたのが、実際に洋行してみれば、およそ予想していたような需要も必要もないことに気づいたのかもしれない。一方、川崎財閥の息子川崎肇との関係が噂されていたと、長谷川時雨は伝えているが、根拠も時期も不明である。なお川崎肇は、長谷川の記すとおり、金子堅太郎の娘キヨと結婚している。

それから1910年に、イネは姉のヒデと共に英国に遊学した。渡英の時期は不明ながら、1912年4月に帰国しており²⁷⁾、その帰国を伝える報道に、二年を過ごして帰国したと記されている²⁸⁾。そして1913年3月には、長女のヒデが長崎駐在のアメリカ副公使であるハロルド・C・ハギンズ (Harold C. Huggins) と結婚したことを伝える記事が掲載された。ブライズメイドこと花嫁付添人は、Miss Inez Brinkley が務めたという²⁹⁾。そして、1914年12月には、イネが日本リーバの取締役 H. T. Thomas との婚約発表が続く³⁰⁾。そして、翌1915年1月16日には、トーマスとの結婚式の記事が掲載されている³¹⁾。

順風満帆に見えるものの、この結婚式から5か月後の6月24日、イネは娘を出産した。名前をふく子という。高い地位にあった男性の子というのが詳細は不明で、イネからは認知されず、麻布の屋敷で働いていた佐々木夫婦の養女として東京の国分寺市高木町で育ったという(図8)³²⁾。おそらく、トーマスは、結婚式の段階でイネの妊娠に気づいていたと思われるが、その後、トーマス夫人としてイネがどれくらい神戸で過ごしたのかはよくわかっていない。トーマスはその時、日本リーバの尼崎工場を建て、労働争議も起こっていたので、多忙を極めていたことだろう。なおその尼崎工場の建設にあたっては、元兵庫県知事である服部一三にあずかるところが大きかった。この服部は、ブリンクリーとともに日本アジア協会の終身会員であったので、便宜を図ったどうかはともかく、イネのことを知っていたのは間違

26) 『新小説』11-12 (1906), p.48.

27) *The Japan Times*, April 17 1912, p.5.

28) *The Japan Times*, April 26 1912, p.8.

29) *The Japan Chronicle*, March 20 1913, "Wedding in Tokyo: Huggings-Brinkley", p.545.

30) *The Japan Times*, Dec. 22, 1914, p.8.

31) *Japan Chronicle*, January 16 1915.

32) これら一連のふく子の詳細と写真については、ご遺族の上松朝子氏および田幸恵美氏より、ご教示ご提供いただいた。改めて心より感謝したい。なおふく子は、年に何回か麻布の屋敷に連れていかれて、イネらしき人にあいさつをしたそうである。写真からもうかがえるように、ふく子は少なくとも周囲からは快活な女性として知られていたという。イネが奔放な女性であることは、一族でも話題になったそうだが、父親のことは一切、語ろうとしなかったという。

いあるまい³³⁾。

そうして『キモノ』が1921年に刊行されることになる。このときのイネの憤慨ぶりを伝える記事によれば、この時、彼女はトーマス夫人ではなく、ミス・プリンクリーを名乗っていたという³⁴⁾。なおアシュトン・ガトキンは1913年から1918年まで日本に駐在し、彼の言葉を信じるなら、1917年から書き始め、1919年にシンガポールから英国への帰路で書き終えたという。八重スミスがイネをモデルとしているのは明らかで、少なくとも東京の英国人社会では常識のようになっていたというように、あからさまにイネ・プリンクリーを思わせる描写と設定となっていた。ジョン・パリスという筆名で書いたアシュトン・ガトキンは、たとえ偽名であっても、こうしたモデル小説が時に名誉棄損の訴訟になることを重々知っていたはずである。イネの出産と、トーマスとの離婚とを知ったうえで、英国の企業に害はなく、イネが訴えれば、こうした私生活が暴かれるゆえに見送るのではないかということを見越して、イネをモデルにして書いたとも考えられるだろう。これらを裏付ける文書はないが、八重スミスは日英同盟がおよそ実りある結果を生み出すものではないことを印象付ける格好の例として標的にされ、おそらくはイネの側でもこうした事情から、訴訟を断念したであろう可能性は十分に考えられる。

おわりに ポール・ジャクレーへの監視とアジア主義の限界

これまで見てきたように日本の要視察外国人の公開された記録を見る限り、時に基準が恣意的で、その意義が疑われる事例は少なくない。最後の一例として、ここでは画家のポール・ジャクレーに触れておきたい。ジャクレーは、長く日本でフランス語を教えた父親の息子として、日本で生まれ育った。日本画や浮世絵だけでなく、義太夫も習得していた粋な芸術家であり、その贅を尽くした異国趣味あふれる版画は今でも高く評価されている。ただ、いかに日本の言語と文化を深く理解したとしても、イネ同様、ジャクレーが奇異なもしくは警戒に満ちた偏見ある視線にさらされてたであろうことは想像に難くない。1930年代の段階で、要視察外国人としてジャクレーが登場しているのはその証左だろう。

父のジャクレーは教え子の一人が大杉栄だったが、その長い教育歴を買われ、日本政府から叙勲されている。この父ポールは日本で逝去し、その後母は京城帝国大学医学部教授と再婚している。その縁で、ジャクレーは、しばしば現在のソウルを訪問して、当時の韓国の人々を版画に残している。同時に、当時の日本でいう南洋を何度も訪問しており、当地の人々を異国趣味あふれる版画に描いたのだった。現在、残っているジャクレーの写真は、和服姿が

33) *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 21 (1893), xix.

34) *Japan Chronicle*, Nov. 5 1922.

多く、当時の日本とその植民地にあつて、彼の姿は少なからず目を引いたことだろう。要視察のファイルには、ジャクレーが取材などで訪問した際の記録が見受けられ、その記録はまた彼の画業を知る上での資料としても利用することができる。

例えばジャクレーは、「要視察人関係雑纂／外国人ノ部 第四卷 12. 仏蘭西人」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04013094000によれば、朝鮮行を本当に家族にあつているのかどうか秘密裏に確認されていた。そしてサイパン上陸に際しては、300枚の風景画を特筆しつつも「変態性欲者」なので注意と付記されている。

この点で参考になるのは、第二次世界大戦下での日本で過ごした経験に基づく実録小説『森のなかの龍たち』（2016）である。作家のピーター・イェルダムが、遠い親族のアレックス・フォーレ（Alex Faure）に聞き取りをし、それを小説にしたものだという。ロシア人の母とフランス人の父の血を引いて日本に生まれたアレックスの視点から1941年以降、戦争に突入した社会の日常を描いた「本当の話」ということになっている。ジャクレーが登場するのは軽井沢でのことである。たしかにジャクレーの年譜をみると、1944年に軽井沢に疎開したとある。戦争が始まって、中立国のヨーロッパ系住民は軽井沢に強制的に疎開させられており³⁵⁾、ジャクレーもその一環として移動したのだろう。

そこで登場する世界的に有名な版画家で蝶のコレクターというジャクレーの姿は、たしかによく知られた側面であるが、フォーレによると、ジャクレーは「オープンなホモセクシュアルで、男性の服はまず着ることがなく、見かける時は、たいていゲイシャのような化粧でキモノをまとっていた」という。50代のジャクレーは、いつも軽井沢で「コリアン・ボーイズ」を連れて歩いていると噂され、その一因は彼の育ちにあるという。つまり、ジャクレーは、「ゲイシャ・ハウス」で育ち、周囲の女に派手な衣装と化粧を施され愛玩されたこと、そして、国際的に有名な版画家となった50代の今も、「あの時と同じ白粉にぬらぬら光る紅、そしてみっちり刺繍したキモノに身を包んで」いるというのである³⁶⁾。これはもちろん伝記的な事実と異なるので、戦争下の物資が不足した環境で、そのように口さがない人々が噂しあつたということなのだろう。

他にも、「要視察人関係雑纂／外国人ノ部 第五卷 6. 仏国人」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04013095900によれば、1932年下田で、書生岩崎勇次郎とスケッチし、ソウルで喉の手術を受けたという。伊豆の大漁と漁師について1939年に版画を作成しているので、このときの経験があつてことだったのかもしれない。また「要視察人関係雑纂／外国人ノ部 第六卷 15. 仏国人」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04013098600によれば、

35) 詳しくは高川邦子『アウトサイダーたちの太平洋戦争：知られざる戦時下軽井沢の外国人』（芙蓉書房出版、2021）。

36) Peter Yeldham, *Dragons in the Forest* (North Sydney: For Pity Sake Publishing, 2016), p.77.

1933年8月27日、「朝鮮京城榮一洞中村祐方居住ノ実母ニ面会ノタメト称シ同地ニ旅行セルカ約ニヶ月滞リノ上帰京ノ予定右及申（通）報候」とあり、依然として実母に会いに行く時でさえも、監視されていたことがうかがえる。

これらの記録は、現在もっとも詳細で正確なジャクレーの年譜とも正確に一致しており、岩崎がジャクレー宅に同居していたのは間違いないと思われる³⁷⁾。岩崎勇次郎は、岩崎忠吉の父と思われるが³⁸⁾、その伝記的な事実はよくわかってない。ただジャクレーは、岩崎をモデルにして多数の作品を発表していることはすでに判明している³⁹⁾。

ジャクレーが日本領となった土地の子供や女性を、日本の木版画の技法で刷りと彫りとを分けて生産するのは、ちょうど冒頭で触れた北澤楽天の描いた子供としての中国大陸や朝鮮半島の姿と比較できるだろう。日本の支配下にあるさまざまな土地の子供、女性、そして若い男性を、保護すべき愛しむべき姿として、西洋画ではなく日本の木版画の技法で描くことは、タウンセンドが予言し、やまとひめの絵が示唆するようなアジアにおける帝国主義的な再編成としてとらえることもできるかもしれない。しかし、ジャクレーの版画はそのような形で利用されることはなかった。これはそこに、そうした植民地主義的な欲望を受け入れるよう拒絶する、独特の曖昧な形象ゆえのことかもしれない。

いみじくもタウンセンドが予言したように、日露戦争と第一次世界大戦は、ヨーロッパとアジアの関係を大きく変えた。日露戦争は、人種戦争として受け取られ、日本の帝国主義のみならずアジア主義を刺激し、インドの独立運動と複雑に交錯した。そうしたアジア主義は、第一次世界大戦後に盛んになったナショナリズムとトランスナショナリズムとさらに複雑に交差していったのである。バラカトゥラーは、そのムスリムの弟子ハサン波多野に密告され、英国政府の圧力で失意のうちに日本を去った。グルチャラン・シンは、陶芸家バーナード・リーチに感化され、朝鮮の陶磁器に深く影響を受け、インドから日本までをつなぐ蓮に注目した。彼の陶芸は、いわばアジアの一体性を象徴するものであったが、同時代の日本ではほとんど気づかれることがなかった。日本人を母と英国人の父のあいだに生まれたイネ・ブリンクリーは、日英同盟を体現する存在として宣伝に使われ、アジア主義が台頭する頃には、非難と好奇の目にさらされた。ジャクレーは、日本の木版画の技法でエキゾチックなアジアを描いたが、彼もまた好奇の目にさらされ、同時代の日本では十分に評価されることがな

37) ジャクレー展を横浜とパリとで開催し、監修された猿渡紀代子氏よりご教示いただいた。記して心より感謝したい。

38) 千葉星定『下河津郷土誌』（梅仙窟、1931）。

39) 猿渡氏によれば、下記の決定版作品集の内、以下の作品が岩崎をモデルにしているという。Un Artiste voyageur en Micronésie: l'univers flottant de Paul Jacoulet (2013), p.259 上段 2点 1927年, p.261 中段 1点 1929年, p.265 中段 1点 1929年 (Iwasaki Akira は弟か), p.275 上段 2点 1930年, p.284 下段 1点 1932年, p.322 写真 (甲板上のジャクレーと岩崎)。

かったといえる。日本のアジア主義が、アジアへの日本の帝国支配を正当化するための大義名分とはよく指摘される。この4人の事例は、いずれもハイブリッドなトランスナショナリズムを体現する点で、アジア主義の主張と親和性が高いはずだが、いずれも衝突かすれ違いに終わったことがわかる。このことは、日本のアジア主義が、こうした双方向的な接触と混交を生み出す領域を十分に考慮せず、一方的な支配なり視線であったことの一つの証左といえるだろう。



图 1



图 2



图 3





図 4



図 5

◆ ニュー・デリーの陶芸家

ウェリントン空港の近くにはファクトリー・ロードという通りがある。ここは大小の陶磁器工場と個人でかまを持つ陶工の地帯になっている。ほぼ全インドにその製品が見られる。アワオール陶磁器会社もここにある。そしてこの地区の指導的な立場に立つ人々の多くが日本に学んだことのある人達であった。大正初期に当時の高等工業に陶磁を学んだという老人に会ったこともあった。

撮影 河部英也



図 7



图 6



图 8

Sketch of Networks Surrounding Four Foreign Residents in Japan in the Early Twentieth Century: Barkatullah, Gurcharan Singh, Ine Brinkley, and Paul Jacoulet

Yorimitsu HASHIMOTO

The Russo-Japanese War and World War I drastically altered the relationship between Europe and Asia. The Russo-Japanese War was perceived as a racial conflict, stimulating Japanese imperialism and Pan-Asianism. This Pan-Asianism was intricately entwined with the movement for Indian independence and intersected with the rise of both nationalism and transnationalism after World War I. This study discusses examples of such intersections by focusing on four foreign residents who lived in Japan from the 1910s to the 1930s.

Muhammad Barakatullah, who was betrayed by his Muslim disciple Hasan U. Hatano, left Japan under pressure from the British government. Gurcharan Singh was inspired by the ceramicist Bernard Leach, as well by Korean pottery; he was captivated by the lotus as a symbol connecting India and Japan. Although Singh's ceramics embodied the cultural unity of Asia, they went largely unnoticed in contemporary Japan. Ine Brinkley, born to a Japanese mother and a British father, was promoted as a symbol of the Anglo-Japanese alliance but experienced condemnation and curiosity as Asian nationalism surged. Paul Jacoulet depicted an exotic Asia using Japanese woodblock printing techniques; however, he too faced scrutiny and received insufficient recognition in contemporary Japan.

Japan's Pan-Asianism is often regarded as an ideology legitimizing for the country's imperial rule in Asia. The cases of the four individuals discussed herein, each embodying a hybrid form of transnationalism, should theoretically align closely with the assertions of Pan-Asianism. However, all four cases end in clashes or misunderstandings. This indicates that Japan's Pan-Asianism lacked sufficient scope for cultural exchange and mingling, instead adopting unilateral domination or scrutiny.